

司式：三田村雅子
奏楽：中井喜久子

前奏：「偉大なる神よ」 (G.A. ホミリウス)

招詞：主に望をおく人は新たな力を得 鷲のように翼を張って上る。走っても弱ることなく、歩いても疲れない。(イザ40:31)

讚美歌 83「聖なるかな」

交読詩編 121 編【都に上る歌。ダビデの詩。】

- 01 目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。
- 02 わたしの助けは来る天地を造られた主のもとから。
- 03 どうか、主があなたを助けて足がよろめかないようにしまどろむことなく見守ってくださいように。
- 04 見よ、イスラエルを見守る方はまどろむことなく、眠ることもない。
- 05 主はあなたを見守る方あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。
- 06 昼、太陽はあなたを撃つことがなく夜、月もあなたを撃つことがない。
- 07 主がすべての災いを遠ざけてあなたを見守りあなたの魂を見守ってくださいように。
- 08 あなたの出で立つのも主が見守ってくださいように。今も、そしてとしえに。

朗読聖書①申命記 8:1-10 ◆神の賜る良い土地

- 01 今日、わたしが命じる戒めをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたたちは命を得、その数は増え、主が先祖に誓われた土地に入って、それを取ることができる。
- 02 あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知らうとされた。
- 03 主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。
- 04 この四十年の間、あなたのまとう着物は古びず、足がはれることもなかった。
- 05 あなたは、人が自分の子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを心に留めなさい。06 あなたの神、主の戒めを守り、主の道を歩み、彼を畏れなさい。
- 07 あなたの神、主はあなたを良い土地に導き入れようとしておられる。それは、平野にも山にも川が流れ、泉が湧き、地下水が溢れる土地、08 小麦、大麦、ぶどう、いちじく、ざくろが実る土地、オリーブの木と蜜のある土地である。09 不自由なくパンを食べることができ、何一つ欠けることのない土地であり、石は鉄を含み、山からは銅が採れる土地である。
- 10 あなたは食べて満足し、良い土地を与えてくださったことを思って、あなたの神、主をたたえなさい。

朗読聖書②ルカによる福音書 9:10-17

◆五千人に食べ物を与える

- 10 使徒たちは帰って来て、自分たちの行ったことをみなイエスに告げた。イエスは彼ら連れ、自分たちだけでベトサイダという町に退かれた。
- 11 群衆はそのことを知ってイエスの後を追った。イエスはこの人々を迎え、神の国について語り、治療の必要な人々をいやしておられた。
- 12 日が傾きかけたので、十二人はそばに来てイエスに言った。「群衆を解散させてください。そうすれば、周りの村や里へ行って宿をとり、食べ物を見つかるでしょう。わたしたちはこんな人里離れた所にいるのです。」
- 13 しかし、イエスは言われた。「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい。」彼らは言った。「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません、このすべての人々のために、わたし

たちが食べ物を買いに行かないかぎり。」

- 14 というのは、男が五千人ほどいたからである。イエスは弟子たちに、「人々を五十人ぐらいつづ組にして座らせなさい」と言われた。
- 15 弟子たちは、そのようにして皆を座らせた。
- 16 すると、イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた。
- 17 すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二籠もあった。

祈祷

主イエス・キリストの父なる神さま、聖名を崇め賛美致します。聖霊降臨節第 19 主日の朝をここに迎え、皆さまと共に、この会堂に集められ、またオンライン配信によって集められた皆さまと共に、この礼拝に集められることが出来たことを感謝致します。

この一週間、私どもは、ともすれば神さまのことを忘れ、主の教えに背き、蔑ろにしてきたことを深くお詫びし、またここに悔い改めます。

能登の災害が再び興って、既に地震によって深い傷を負われた方々が、また更に苦しんでおられます。このような二重の災害というものが私たちの周りでは沢山興っています。能登の皆さまに一刻も早く支援の手が届きますようお願い致します。そしてこの二重の災害ということで私たちが粘り強くそれらの方々の生活を支えていくことが出来ますように、心を支えていくことが出来ますように、私どもの支援もしっかりと続けることが出来るように私どもを強めてください。東日本の大震災も、まさに地震の災害だけでなく、原子力発電所の事故によって、長いながい放射線の被害の中に苦しめられている方が今も沢山いらっしゃいます。そのような複合する災害の中で苦しんでいらっしゃる一人ひとりをどうぞ助けてください。私どもがしっかりとその方々に寄り添うことが出来ますように、私どもが出来る限り力を尽くすことが出来ますように、どうぞ私どもを強めてください。

夏の暑さもようやく和らぎつつありますが、長い夏の疲れによって弱っている自分を自覚します。お歳を召された方々にとって、これほど過酷なこの夏の暑さだったと改めて思います。お歳を召された方がこの教会にはたくさんおいでになって、そしてその方々は伴侶を失われた方もいらっしゃる、体の不調を抱えて次第に閉籠りがちになっていく、そういう老いの日々を迎えていらっしゃる方もいらっしゃいます。それらの方々にどうぞ神さまが寄り添ってお守りくださいますようお願い致します。またその老人たちと共に介護に日々を過ごしている私どもにも、その先人たちに負けないような豊かな老いを迎えられるようにお支え下さいますようお願い致します。

私どもが教会の中の傷ついた輩である方々のことも忘れないでいることが出来るようにしてください。その方々に寄り添い慰めてくださいますようお願い致します。今、苦しさや寂しさの中にあるその方々のために、その方々に信仰の熱を取り戻すことが出来ますように、生きる力を取り戻して下さることを願ってお祈りを申し上げます。

今、私どもは 100 周年の記念の年を迎えています。主な行事は 6 月までではほぼ終了致しましたが、その実りを記録し、記念する出版物の準備についてはまだまだ山場にありますが、この努力の積み重ね、私どもの教会を振り返りようとする、そういう営みが教会の更なる 100 年に繋がっていきます

ように、どうぞお守りください。

今日は『主の御業』についての鮎川先生のお話を戴きます。どうぞ、子どもが謙虚にその教えを受けることが出来ますようお祈りいたします。

主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げします。アーメン。

讚美歌 56「主よいのちのパンをさき」

説教「主がなさる」

鮎川健一

今朝は少し暑さが和らいだような中にありますが、これまでのところ、お祈りにもありましたけれども、酷暑の日々、様々に過ぎて行った出来事を思い起こされます。中でも人の命、生きることに對して、人の思いや感情が頭をもたげてくる、そのような中にもありますけれども、キリストを信ずる信仰者たちは、次々と課題の迫るこの世にあって、何を思い、何を為してゆくものでしょうか。私たちの思いを神はご存知であり、様々な思い煩いも、また神への懺悔と感謝の祈りと共に、この日曜の礼拝毎に心新たにさせられるものです。今朝の御言葉からも、この二千年の時と場所を越えて私たちは神のご計画の内に生かされている、このことを思い起こします。

今朝の前の場面では、“主イエスに遣わされた 12 人の弟子たちが村から村へと巡り歩き、福音を宣べ伝え、病気を癒していた”記事がありました。弟子たちにとって何よりも、今まで主が為さることや語ることをすぐそばで見聞きしていたことに倣って、自分たちも人々を癒し、主が語った様に福音を告げました。彼らにとっては、神が生きておられ、共に働いて下さっていることを身に染みて知らされた夫々の体験でした。主の下に帰って来て、なかば興奮気味で事の次第を報告したのでしょう。その後、主は弟子たちとベトサイダという町に退かれました。この「退かれた(ὑποχωρέω)」とは、ただ“神との交わり、祈りのためだけに人との交わりから退かれた”という意味があります。非常に困難を強いられる宣教の日々の後で、“ひと休みする”という深い意味もあります。そもそも宣教の報告は、まず神に対して為されるものと受けとめます。宣教の業は、人の功績よりも全ては神に栄光を帰するものだからです。神の御前に感謝を献げ、その中で欠けも見つめます。その為に主は弟子たちを連れて、このベトサイダという町に退かれたということです。私たちが神の御前に退く時を大切に思います。ここで「御前に退く」という意味から、教会の様々な業を思い浮かべると、教会の業は全て神の御栄光を求めての業だということです。私たちは何か事を始める前には、必ず祈りをもって始めるものでしょう。日常のみならず、教会で言えば、教会学校が始まる前にも、またこの主日礼拝の前にも備えの祈りを持つでしょう。また家庭集会や修養会、夏になればキャンプや研修会でも同じことがあるでしょう。教会の業は神の御業、神主体の御業ですから、私たちの気の向くままに始めるわけではない、ということだからです。また終わりの祈りも大切です。会が終われば慌しく解散するのではなく、感謝と恵みを覚えて祈り、そして主から課題を受けて教会から夫々が出て行くことは、信仰者にとって欠かせないことです。

聖書に目を向けて見ますと、群衆たちは主が退いているのを許しませんでした。自分たちが“見捨てられた”と思ったのでしょう。後を追いました。マルコ福音書には、群衆の熱狂的な姿が描かれています。これもマルコならではの報道スクープ的描写の緊迫感迫った表現ですが、ルカでは印象が少し異なります。それでも主は群衆を追い払いませんでした。主イエスに

しても弟子たちにしても、このひと時の休みが必要だったことは確かです。今は大切な祈りの時、ということです。それでもお構いなしに人々は押しかけます。しかし主は 11 節のように人々を受け入れます。「イエスはこの人々を迎え」たのです。ここにも注意が必要です。主の思いと群衆の目的意識とはまったく異なっていたということ。群衆は我先にと言わんばかりに土煙をあげて駆けつけ、のべつまくなしに相手の都合を顧みずに自分の思いをぶつけます。

事態はこの日の夕方に起きました。弟子たちは主に願いました。「群衆を解散させてください。」と。これは集まって来た人々に対する安全配慮にも聞こえます。おそらく一般的には、この事は“善し”とされるでしょう。主の一行は祈るために退かれたので、人里離れた所におりました。ですからそこには十分な食物も立派な宿もありません。ましてや夕闇せまる頃ですから、真っ暗になる前に人々を解散させて、皆に食物と宿を確保させようと弟子たちは考えたと思えられます。それは多くの人たちのことを思っていること、大半の人たちが思い浮かぶ行動だと思います。しかしこの時の群衆の人数は「男が五千人ほどいた」と記されています。男だけで 5 千人—この書き方は現代風に言えば色んなことが起きるのでしょうが—。女性や子供を合わせますと、当時の人口分布からではその倍、1 万から 2 万人くらいと考えられます。もしそうであるならば、またそれ以上であったとしても非現実的な話の流れです。今では、そういったことがあったとしても色んな手段を使って可能かもしれませんが、夕闇せまる人里離れた所で 1 万から 2 万人分の食べ物をすぐに用意するなど無理難題です。当時のことを思えばなおのことです。しかし主は弟子たちの心を見透かしているかのように、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」(13 節)と命じました。時間や場所からして、弟子たちは主の言葉に呆れ顔であったことでしょう。“何を主は言うのだろうか、そんな無理なことを”。そこで弟子たちは言います。「わたしたちにはパン五つと魚二匹しかありません。」と。これは主と 12 人の弟子たちにとっても、決して、目の前にある物を見ては、決して十分とは言えない量です。それならば弟子たちは群衆のことを心配してではなく、自分たちの、これから戴くであろう夕食のことを心配して「群衆を解散させてください。」と言ったとも聞こえます。— 大半はこういったことが裏にあるはず、人々のことを思って色んなことを考えを行ったとしても、腹の底では自分のことしか考えていない。そういうことが社会一般にある。表向きにはいいことを言っているも裏では全然違う行動パターンになっていることは日常です。—

それにも拘わらず主は、群衆なる成人男子を 50 人位ずつ、実際には 100 人位と考えられますが、夫々組に分けて座らせるように命じられました。すると主は、5 つのパンと 2 匹の魚、この魚はガリラヤ湖ですからいろんな魚がありますが、恐らく大きくはないでしょう。小さい魚です。海で言えばイメージ的にはアジの丸干しのようなものでしょう。川魚を思い浮かべたとしても、たとえ 2 匹としても、そう大きくはありません。それを手にして神に讚美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡し配らせました。すると 5 つのパンと 2 匹の魚でも、配っても、配っても無くならない。最終的には、12 籠に残りのパン屑が集められたというわけです。ここに集められた 12 人の弟子たちが一人ずつ籠を持って、夫々がパン屑を籠一杯集められた、そういう計算にもなります。

聖書を或る関心事をもって読む人にとっては、“主の奇蹟の中で、この出来事が最もイメージしにくい、受け止めにくい出来事”と言われます。逆のことを考え

れば、歩けない人が歩くようになる、目の見えない人が見えるようになる、起き上がれない人が自分の足で立って歩くようになる、起き上がるようになる、そういったことは、少しはイメージ出来るかもしれません。しかしこの出来事は、天地が転がっても5つのパンと2匹の魚が増えなければ不可能とってしまうものです。この世で生活している現実の世界では、常識に多くが縛られます。ちょっと難しく言えば、物理学的には『質量保存の法則』と言えるでしょう。“物質は形を変えて体積が増減しても重さは変わらない”ということです。イメージ的には、“水と水蒸気”、“ザラメと綿菓子”、“ポップコーン”などを思い起こすと分かり易いかもしれませんが、そこで、この奇蹟は合理的に解釈されてきました。それは“群衆の中で自分の持っていた弁当から分け始め、その結果、皆が満腹になった”という解釈です。こうなれば、現実的な解釈で、人々の善意を裏打ちした刺激の強い話となります。そうならば、福音の根幹抜きに、“困った人たちと分け合しましょう”的な道德倫理の話になっていって、至ってはキリスト抜きでも成り立つようなお話です。最初からこう読んで理解するならば、教会の出来事は、全て人間の心の思うままに、その時その人々の良し悪しで決められてしまいます。誰が何をしてもまた何を言っても苦難困難は起こらず、何の躓きもないこととなります。それなら奇蹟でも神の御業でもなく、果てには、主の御誕生から十字架の死、復活の命すら初めから無かった、聖書は昔の古代神話や、また小洒落た文学のようなものと同じになり、見方によっては、ごり押しの倫理観となってしまいます。実際、聖書に記されている出来事の証言は、現実世界の前提と真向から対立します。それは創世記の1ページから対立しています。ここが最も重要です。聖書は科学の教科書ではないということです。聖書は信仰の書である、だからとて物理論やその他の科学理論を真向から否定するものでもありません。私たちは神が真実を為したことを、聖書を通して、既に洗礼の時から信仰告白を続けている者ですが、主が無から有を造り出した天地万物の造り主、真の神であられるからに他なりません。更に言うなれば4つの福音書全てに、この事が記されている主の奇蹟は、この奇蹟だけです。ここでの弟子たちは、ただ主の傍で見てだけでなく、自分の手で配ったのです。誰の手も借りずに、自分の手で食物を配った。そこで彼らは驚き喜び、イエスというお方が誰であるか、このことを心底知らされたのです。この出来事の後でペトロは主の「あなたがたはわたしを何者だと言うのか」という問いに対して、「神からのメシアです」という明快な信仰告白をします。今朝の申命記の箇所をも思い起こします。「あなたは、人が自分の子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを心に留めなさい。あなたの神、主の戒めを守り、主の道を歩み、彼を畏れなさい。」(8:5-6)。

福音書記者の信仰表現からキリスト教会にも伝わった、あの主イエス・キリストの御体である聖餐のパンを示すものとして、今朝の箇所、そこから理解されるようになったということもあり、キリスト教会は二千年の間この聖餐のパンを与える者として立ち続けてきました。聖餐に与る度毎に、弟子たちは五千人の人々にパンを配った時のことを思い起こし、それを為された主を仰ぎ見る信仰、天地万物の創り主なる神ご自身への信仰を抱きました。後に弟子たちは、「五つのパンと二匹の魚しかない。」と言ったことを恥じたでしょう。主の御業を信じ、委ねることが出来ず、目の前にあるパンと魚でしか事を判断できなかった、その自分を恥じたことでしょう。ここで弟子たちは、神が共におられるならば5つのパンと2匹の魚で十分であるということを知られたのです。

教会も私たちも、常に5つのパンと2匹の魚しかないのです。我が身を思えばなおのことに思いますが、主が“事を為せ”と言われる御命令を為していくには、“はじめから余りにも小さい器であり、欠けに満ち、このままではとても生涯御命令に従い続けるなど出来そうにない”、こう思うほどに切迫しています。しかし実際そうであったとしても“とても無理です”と思うときにも、自分では無理と思えることを神が共におられて為して下さい、その神の御手の中にある奇蹟の中に、自分は歩み出そうとしている、ということを知られます。それが宣教の業の力として浮かんでいきます。そして祈りの力を受け止めつつ、“御心のままに事が為されますよう”にと祈り、そして日々歩み続けます。神による奇蹟の歴史を、私たちは神の導きによって歩む者とされています。それがキリスト教会の歴史です。主が私たち一人ひとりに命じられることは、主がその御力を持って先頭に立って為して下さいということです。弟子たちは、パンを配りましたが、パンそのものを増やすことはされませんでした。それは弟子たちのすることではなく、主が増やし養って下さるのです。私たちは主の命ぜられるままに配るだけです。配ってもなくならないキリストの恵みを、主の十字架の死から復活の命へと勝利したキリストの福音、真の命を、御国の世継ぎとして証しの信仰生活を成してゆく中で伝えてゆきたいと心から願います。

祈りましょう

主イエス・キリストの父なる御神さま、あなたの歩みの中、祈りと賛美を献げる幸いに感謝致します。あなたが真なる救いの光をこの世にお与えになられてからも、今なお、この世の闇は続きます。どうか主を見上げて歩む一人ひとりに、確かな道、救いの光に生きる者とさせてください。またどうか罪深い者を赦し清め、主の証人^{あかしびと}として用いてください。なお永遠の命に生きる者と為さしめてください。またどうか、御言葉にあって、全てが主に向けて為される者でありますように。御心が隈なく限りなく、もたらされますことを願います。

憐れみの主よ、今、この日、この時、苦難と悲痛に呻く者たちに主が共に居てくださり、御心のままに祈りを聴き上げてください。救いの道へと向かわしめてください。

時を同じくして祈る友の祈りと共に、主の御名によって、御前にお献げいたします。アーメン。

讚美歌 456「わが魂を愛するイエスよ」

献金・感謝・主の祈り(野呂道子)

愛する天の父なる神さま、今日もこうして日曜日の朝、教会に招いてくださり、主日礼拝をお献げ出来る恵みを感謝致します。

今日は『五千人に食べ物を与える』という聖書箇所から鮎川先生のお話を伺いました。神さまの恵みの中で生きられるこの祝福に感謝しつつ、あなたに心を向けて、あなたに祈り続けることの出来る私たちでありますように、新しい一週間もあなたがお守りください。

今この時、教会に来ることが、病気や様々な事情で出来ない方々、ライブ配信で共に礼拝をお献げしている方々のことを覚えます。どうぞ、あなたが私たち一人ひとりの傍にいて導き守ってください。

私たちは日々、あなたから必要な物を全て与えられております。その中から、一部ではありますが、今、あなたにお献げいたしました。どうぞあ

あなたの御用のためにお用いてください。

新しい一週間を始めるにあたり、イエスさまが教えてくださった「主の祈り」を共に祈り、新しい一週間を、神さまの方を向いて歩んで行くことが出来ますように。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌：88「心に愛を」

派遣・祝福：主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しき交わりが、ここから遣わされていくあなたがた一同と共に、今も後も永遠にあるように。アーメン。

報告：窓拭き清掃案内。

後奏：「ただ神にのみゆだねまつる者は」 (J.S. バッハ)